

神は功利主義者でありうるか？—緊急の生命倫理問題

Greatchain

2019/12/12

「科学の蜂起」 Science Uprising と呼ばれる、唯物論科学や進化論をゴリ押しする風潮を批判する運動が拡大し、医学や医療の生命倫理の問題にまで及んでいる。論者は Wesley J. Smith といい、この問題の急所がどこにあるか、その危険と恐ろしさを的確に述べて、我々の目を開かせている。

「医学医療やその関係の職業的学校に入学することは、やがて、良い成績だけでなく、適正な道徳的な見解をもつことに、大きく依存するようになるだろうと思われる。」

これはどういう話か？ これは「あなたは一流大学の医学部に合格したんだってね、すごい、さぞかし頭脳は優秀なんだろうね」——という話題で済まされなくなるようになるかもしれない、という話である。つまり、大学から、「検討してみたが、あなたの医学部入学はお断りする」と、いう返事がくるかもしれない、という話である。そして、ウェズリー・スミスは、結論にこう言っている：——

「シュークレンクやその徒——医師の良心など否定する、名うての人物エゼキエル・エマヌエルらは——頑として大真面目に、医療業界内のすべての異論を押しつぶそうとして、これを文化的パラダイムにまで押し上げようとしている。彼らは有名な医者、看護師、薬剤師、それにすべての誤った考え方をする医療施設、特に、宗教的で、プロ・ライフの類いのものを、道徳的にクレンジする（浄罪する、切り捨てる）計画をもっている。」

かりに、こういう医者ボスがいて、これが医学界の権威者として君臨し、あらゆる医者を黙らせるような権力構造になっていたらどうだろう？ 私は実情を知らないが、それは十分にありうると想像できる。これは最高に恐ろしく、かつ不気味である。それは私のいつも言う「純粹悪」とも「知的サタン」とも言うべきもので、神と対抗して、この世界の権力を完全に握り、それを滅ぼすことができるだろう。それは知的権力者として、よだれの出る、甘い蜜のような悪の世界に違いない。我々は通常、医者知識をもたないから、何をされようが、言われようが医者の権威に従っている。

そういうことがあっては欲しくない。医療の施される我々の世界は、すべて良心をもつ、やさしい人々のものであって欲しい。しかし、この悪の誘惑は仮定ではない。我々はそれが仮定ではなく、現実であるような世界に住んでいる。我々は、ペドフィリアが文化として存在するよう悪の極致の世界など、あり得ないものと思っていた。しかしそれは現実に存在していた。

私は「脳出血」の患者として、一時、恐ろしい体験をした。もし私の言葉が本当に「飛んで」しまって戻らなかったら、どうしたらよいのだろうか？ 私の周囲には、そういう患者が数人いた。「あれだよ、あのあれ、あれ、あれ」と言って苦しむ患者がいた。これは、我々の言語能力が戻るという保証がないかぎり、人が考えるより恐ろしいものだ。しかし、もっと恐ろしい想定をすることもできる。もし我々の想定するような、冷酷な医学の権威者が、「あれあれ」と言っている患者を、「不適応者」として「切り捨てる」決断をするとしたどうか？ それは「合理的」であり「功利的」でもあり、素人として我々患者は、異を唱えることはできない。ではどうするか？ このゾッとする判断をあなたは受け入れるか？

実はこの問題は「優生学」として、百年ほど前から、アメリカを中心に起こっていた。今起こっているのは想定だが、その生き返った亡霊だともいえる。「優生学」と訳されているのは、Eugenics という、ダーウィンのいとこ、フランシス・ゴルトンの造語で、これを盛んに唱えた者たちは、(ダーウィンの犬と言われた)エルンスト・ヘッケルなどのように、不治の病気や精神病患者や悪性の遺伝病者を、人道的に治療することは、病気を蔓延させるだけだから、やめるべきだと、カナダの Schuklenk や Ezekiel Emmanuel らと、全く同じような主張をした。

まさに歴史は繰り返す、そして輪をかけて繰り返すことが、これでわかるであろう。そして NHK 番組などが執拗にくりかえすダーウィンという人物は、純粋な生物学者でなく、唯物論者の本質である冷酷さをもっていたことが推測できる。ダーウィンの優生学は、ヒトラーに勇気を与えただけでなく、スターリンにも、毛沢東にも、ポル・ポトにも影響を与えたと言われる。彼らの優生学は「徒食者」idle eaters という、この頃よく使われた言葉に象徴されている。

いったい何が間違っているのか？ 私の体験した短い病院生活でも、そこには「医師に良心や道徳は必要でない」というような、共産主義者か、功利主義者の冷酷な教えのようなものを感じた。それが単なる思い違いならよい。しかし、そのような不気味な思想が、もし現実に存在するなら、これは早急に改革しなければならないだろう。

数十年前、私が数人の人々に、神の創造という言葉を使ったとき、その一人が言ったことを今でも思い出す。彼は、あなたは神の創造などと言うけれど、それはただ、「ほっといたらできちゃった、というだけのことでしょうが…」と言った。これは完全なダーウィン思想で、完全な虚無思想である。それはあまりにも見事に洗脳された、手軽な考え方であることが驚きであった。今でもそんなことを言う人がいるだろうか？ おそらくいないだろう。現在は何らかの、ねじれ、ひねくれた進化論が通っている。それは意地を通すことによって、胡散臭く怪しげな、ウソであることが見え透いた、犯罪的ダーウィニズムにつながっていく。読者はこれを冷静に観察されるとよい。

このねじれ曲がった思想家たちは、神という最も単純な真理を、何とか避けようとして、あるいはこれに復讐しようとして、策を練り、ウソを宣伝し、半ば無意識に罪を犯している。あるいは神の真理を認めることが怖いゆえに、臆病者として生きている。彼らは神の真実を何とか避けようとして、共産主義、無神論、唯物論や唯脳論、ダーウィニズム、優生学、功利主義、サタン信仰、悪霊信仰などにつながっていく。そして、これが最も大きく括られたとき、「陰謀団」という言葉で表現される。

「インテリジェント・デザイン」という、いま急速に発展しつつある運動は、この黒い雲を一掃しようとする運動だと言ってよい。この「陰謀団」こそ、これを最も忌み嫌い、恐れ、隠そうとする、知的詐欺師であることによく注意されたい。これは宗教運動ではない。病み歪んだ精神を正常化する運動である。

神は明らかに「デザイン」によって、意図的に、固い意志と、目的をもってこの世界を創った。一つひとつ、あらゆるものに念を入れて創った。我々が目にし、手にするすべてが、我々のために創られている。そのすべてが神でできている。そしてそのすべてが正確な数値でできている。我々の世界は間違いなく、目的論的につくられている。神は初めから、我々を創ろうと、超インテリジェンスを用いて創った。この事実は、これを否定しようと画策する陰険な者たちを倒して、今にも光を放とうとしている。

大勢の人々が今、病み、光を求めている。しかし光は勝手にやってこない。これは今起きている、神とサタンの霊的闘争、魂の解放の闘争に参加することによってしか、我々は光を掴むことはできない。――私が言葉の記憶を失っても、あなたが身体的自由を失っても、また、あなたが肢体不自由児と呼ばれる「神の子」を抱えていても、それは同じであろう。

われわれは何のために生きているのか？